日刊 動労千葉

86. 8.15

No. 2320

国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一一八（動力車会館）
（鉄電二九三五～六・（公衆）〇四七二(22)七二〇七

国鉄「分割・民営化」阻止！三里塚二期着工粉砕！

労働者が人間的な怒りを噴き放ち 必死になって闘い抜いたとき支持をえる

国鉄労働者が闘わないでどうして勝利できようか

南雲さんや、六十数人の尊い命を奪った者は分割・民営化の既成事実をしゃにむに積みあげ、一方で国鉄労働者をムシケラのように扱う中曽根であり、杉浦であり、その手先となって労働者の首切りを中曽根・杉浦に要請し、自分達だけ助けてもらおうという動労革マル・松崎だ。こんな連中を絶対に許してはならない。怒りをたたきつけろ！

他力本願では勝てない

そして、国労中央も同罪である。南雲さんが所属する国労は、雇用と組織を守るためと「大胆な妥協」路線へと後退した方針を決定した。しかし「三人に一人」の首切りを大前提とする以上、「大胆な妥協」では雇用も組織も守れるはずがないことは誰の目にも明らかだ。にもかかわらず、雇用安定協約・進路アンケート調査・労使共同宣言・広域配転・企業人教育などの攻撃に揺さぶられ、動労・鉄労・真国労にいたぶられてきた。

これらの攻撃は「国労解体」一点へ集中した攻撃であったが国労中央は、この攻撃の本質を突く闘いを構築でき得なかったばかりか、情勢をひっくりかえす指導をもせず、敵の攻撃を小手先でかわそうとする指導ならざる指導を繰り返してきた。

国鉄労働者の血叫びに応えよ

中曽根は「労働者の完全な屈服」を基本方針にすえ攻撃をかけてきている。

三〇四議席におごりたかぶる自民・中曽根、運輸大臣・橋本、杉浦と革マル松崎らは職場・労働者に集中砲火のごとき攻撃をかけてくることは必至だ。

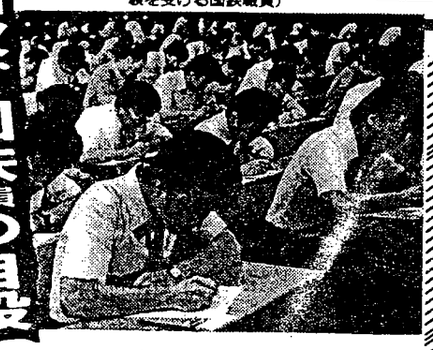
とりわけ、六・二九マル生大会で「国鉄改革への妨害者を力で壊滅へ」と宣言した暴力的組織破壊攻撃に革マル・松崎を先頭に立てやってくることは確かだ。

まさに重大な危機のなかで、闘争と勝利をまちのぞんでいる国鉄労働者の血叫びに応えなければならない。

日刊ゲンダイ 61.8.5

相次ぐ国鉄職員の自殺

9万人もの人員整理に対し世間は冷たすぎないか



*強制・転職に浮かない表情（東京都の行政職採用試験を受ける国鉄職員）

国鉄職員の自殺者が相次いでいる。一日には三十歳の若きで、国労分会長が職場の国電秋葉原駅ホームから電車に飛び込んだ。国労によると昨年一月から今年五月までの自殺者は六十一人にのぼるという。これらすべてが分割・民営化を直接の原因にしているのではないにしろ、改革に伴う九万三千人の“切り捨て”が大きな背景になっていることは間違いない。ところが、この空前の大量人員整理に対して、世間はあまりに冷淡だ。しかも国鉄民営化を進める中曽根自民党は当然としても、民間の労働界からも、民社の野党は見て見ぬふり。マスコミも“仕方ない”という風だ。そのうえ、当の総評や社会党が有効な方針を立てられない状況だから、国鉄職員は浮かばれない。

国鉄再建監理委員会の合理化案によると、二十七万六千人の国鉄職員のうち九万三千人が余剰人員とされ実質的なクビ切りにあう。四万二千人は新会社に移行する来年四月から三年以内に転職しなければならない清算事業団（旧国鉄）に振り向けられ、三万二千人は新会社に移されたあと、鉄道以外の関連会社などに放出される予定。残る二万人は希望退職という内訳である。寒に職員の三人に一人が国鉄を追われる。現在その選別が行われている真っ最中で、考えてみれば自殺者が続出するのも無理はない状況なのだ。

「ムリに秋葉原駅で自殺した職員のような国労の下級幹部は、針のムシロです。背に腹は代えられず転職しようとすれば、組合との板バサミになる。かといってじっとしていれば“野垂れ死に”するのは目に見えている。分割・民営化を苦にした国鉄職員の自殺者は、今後ますます増えると思いますよ」（労働評論家の板垣保氏）

九万三千人もがクビを切られるとなれば、三井三池の大争議があった一九六〇年代なら、一大社会問題に発展し、世の中、騒然としていたはず。ところが八〇年代に入った今、社会党や総評はなすすべなし。国労自身も決定的な方針を打ち出せない。そうした世の動きを見てとって、動労や鉄労は国鉄当局との協調に走っている。

またマスコミもこれだけの自殺者が出ているにもかかわらず人員整理を前提とした論調だし、世間も冷たい反応に見えている。作家の小中陽太郎氏がこう言う。

労働界も野党、マスコミも見て見ぬフリ

「国鉄を生きがいとして長年働いてきた職員が、民営・分割の名のもとに職と希望を奪われ、自殺して行くのを見るのはつらいことです。そもそも民営・分割の原因になった大赤字は、第一に国の政策や国鉄経営者の問題。それなのに国鉄職員が一身に責任をかぶされ、戦後最大のクビ切りにさらされているのはおかしな話です。それを半は是認し、根本から問題にしようとしない労働界の大半や野党、マスコミ、世間は一体どうなっているのでしょう」

こうした社会風潮をいいことに、中曽根自民党は民営・分割に突き進んでいる。それに対してなすすべもない国鉄職員の自殺が続くのも当然だろう。

九万人もの“大量クビ切り”が「やむを得ぬ犠牲」としてまかり通るほどの政策の行革キャンペーンの間にヘンな世の中になったものだ。

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉砕せよ！